

シンポジウム「外国から見た日本」

1853年7月8日、江戸湾浦賀沖に四隻の船が表れ、開国を迫った。いわゆる「黒船」の司令長官は、ペリー（Matthew Calbraith Perry, 1794-1858）であった。ペリー艦隊の来航以来、日本が鎖国を解いて久しい。現在に至るまで、エドウィン・ライシャワー（Edwin Reischauer, 1910-90）やドナルド・キーン（Donald Keene, 1922-）など日本文化に造詣の深いアメリカ人が現れ、日本文化を紹介してきたが、アメリカ人以外にも日本文化を紹介してきた外国人はいる。近年、日本への観光客が著しく増えている。日本への興味は、さかのぼれば19世紀ヨーロッパにおけるジャポニズムにたどり着くことができるかもしれない。

一方で日本人は、開国以来他国の文化を取り入れたり、自国の文化を紹介する上で英語を身につける必要に迫られた。しかしコミュニケーションに関しては、日本で生まれて「英語らしく」使っているが、ネイティブ・スピーカーの使っている英語と異なる英語を使うこともないわけではない。さらに、たとえ正しい英語を用いてもどのように日本を紹介したらいいかという点も問題となる。

本シンポジウムでは、2020年に東京オリンピックを控えた今、外国人がいかに日本を見ていたかだけでなく、コミュニケーションをはかる上で用いられる日本人特有の英語、さらにいかに日本を紹介すればよいのかという点についても考察してみたい。パネリストは、それぞれの分野に関心のある3人をお願いした。有意義なシンポジウムになることを祈っている。

文責（コーディネーター）：吉田 一穂

「*Murray's Handbooks for Travellers in Japan*に見られる日英間の視線」

清水 由布紀

19世紀半ばに列強に港を解放した日本はその独特な文化から西洋の注目を集め、ヴィクトリア朝の人々にとって、日本は魅惑的な旅行地になった。イザベラ・バード（Isabella Lucy Bird, 1831-1904）が日本を訪れた時代、旅の参考になったのは旅行記や新聞、学術誌だけだった。彼女が読んだどの本にも日本の実情は書かれておらず、日本が“fairyland”である印象を持たせるものが主だったことがわかる。『日本奥地紀行』が出版された1880年代から、日本のガイドブックが登場し始める。中でも当時のイギリスにおいてガイドブックの代表格であったのは、マレー社（John Murray）が発行する *Murray's Handbooks for Travellers* というイギリス国内外のガイドブックのシリーズである。このガイドブックの日本版は当時の日本学者の大家が関わっており、19世紀後半のイギリスから来た旅行者は、日本を見てそれが何か学術的な情報を知る手立てがあった。つまり博物館のように説明を見ながら実物の日本を鑑賞することができたのである。小川一真（1860-1929）は第4版に沿った写真集を出しており、日本は見られている一方、どのように見られるかを見せることにより操作している。日本とイギリスの両者の間にある視線は見る／見られるの一方的なものではなく、見せるという視線に対する対応も含んだ複雑なものである。

「韓国人から見た日本人の英語」

伊藤 由起子

日本語と韓国語には多くの共通点がある。——形態としては膠着語であることや、統語的には語順がSVOであること、また後置詞を使用することなどである。この点から、日本人が発する英語と韓国人が発する英語は似るのではないかと仮定した。そして、そのことを調査すれば、共通点の多い2つの言語に特化した効率的で効果的な英語の教え方が見つけられるのではないかと考えた。この仮定を基に様々な研究を行ってきたが、本シンポジウムでの発表では、その第一歩として、まず、日本語と韓国語の共通点と相違点について解説し、それらの点がそれぞれどのように、発せられた英語に反映されているかを紹介する。そして、主に後者（相違点）を掘り下げ、「外国から見た日本」のテーマに沿って「韓国人から見た日本人の英語」について発表したい。

「インバウンド概観と拙著『観光日本への誘い』の成立と特徴」

伊勢村 定 雄

近年のインバウンド（海外からの訪日観光客）のブームは、20年前、30年前の外国人旅行者事情を知る者にとっては、隔世の感がある。この「インバウンド」という言葉からして、耳にすることさえなかったが、現在では各都道府県、政令指定都市では「インバウンド担当課」さえあるのも珍しいことではない。こうした現状に対処するために、各所で様々な対策と準備が急がれている。そうした例が、大学における観光コースの設置や英語コースの中に設けられた資格試験対策である。

本発表で、私が紹介させていただく自作のテキストもこうした一連の流れの中で生まれたものであり、特に海外の人に日本を英語で紹介したり、案内したりすることを目指すものであり、一つのモデルとなりうるのではないかと思います。タイトルは『観光日本への誘い』と銘打っておりますが、その英語名は *Enjoy the Old and the New An Invitation to the Landscapes of Japan* とあるように、まさに訪日観光客に対して、日本の歴史だけでなく、現在のブームや地理的特徴だけでなくそこに住み働く人々の息吹を表現するために、限られた語彙力を駆使して様々な観点から試みがなされております。こうした試みの一端を、テキストより具体例を示しながら、インバウンドへの対応の一例としてご紹介させていただきたい。なお、発表概要は以下の通りです。

0. インバウンド全般について
1. 『観光日本への誘い』を書き始めた契機
2. このテキストの構成と対象
3. このテキストの中でも、特に意を用いた箇所（表現方法を中心に）
4. 今後の課題

講演

「迷惑な英文学について」

安 藤 文 人

2007年、所属する学部の改編を期に、英文学の教育と研究から離れ、学部の英語教育を専ら担当してきた。その間、全て英語で教える授業・カリキュラムの充実を図り、この春には民間試験の活用による4技能型入試も導入し、英語教育における高大接続にも道筋をつけた。実際2020年からはセンター試験も4技能化することが決まっているが、そのような到達点から現今の英文学教育を見ると、高校、あるいは大学において様変わりしつつある英語教育との間に、非常に大きな懸隔が生じているという感を禁じ得ない。そして、その隔たりを挟んで見えてくるのは、日本の英文学教育、あるいは研究活動の極めて特異な様相である。すでに門外漢となっはいるが、英文学を学んだ多くの学生が中高の英語教員となり、英文学に携わる教員が大学入試の作成にかかわる以上、ガラパゴス化した英文学教育が英語教育に与える弊害について述べることは許されるのではないかと考えている。